



万宝 園花  
 日本居家秘用  
 硯墨筆  
 深色六  
 雜門

78
1
6



日本居家秘用卷八

○硯墨筆

け部は硯墨筆乃をらひ  
やう硯水に用ひやう紙より  
てとれ書やう唐紙乃目  
折乃をやう朱印肉乃あつせ  
やうきんを紙よりん

○染色

け部は絹布をめん乃染  
やうより毛乃類角類乃染  
やうあるひハ染色のめらやう  
は汁乃用ひやう一切染物の  
事致とがく之の正らん

同會

門

居家秘用

○雜門

此部にはあつちの皇室あり  
事は元中へてまゐる

日本居家祇用卷八

○硯雲筆

▲非<sup>かき</sup>乃<sup>と</sup>小<sup>せ</sup>書<sup>しよ</sup>畫<sup>くわ</sup>を<sup>ま</sup>書<sup>か</sup>す  
油<sup>あぶら</sup>氣<sup>け</sup>成<sup>なり</sup>去<sup>り</sup>る<sup>紙</sup>紙<sup>を</sup>を<sup>ぬ</sup>ぬ  
の<sup>と</sup>不<sup>あつ</sup>契<sup>たい</sup>成<sup>なり</sup>を<sup>ま</sup>書<sup>か</sup>す  
て<sup>油</sup>油<sup>を</sup>氣<sup>を</sup>さ<sup>る</sup>又<sup>又</sup>真<sup>ま</sup>綿<sup>めん</sup>あり  
ハ<sup>ハ</sup>灯<sup>とう</sup>心<sup>しん</sup>少<sup>す</sup>て<sup>少</sup>撈<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>

▲常<sup>ちやう</sup>小<sup>せう</sup>用<sup>よう</sup>成<sup>なり</sup>は<sup>切</sup>切<sup>き</sup>く<sup>紙</sup>紙<sup>を</sup>を<sup>ぬ</sup>ぬ

墨<sup>すみ</sup>れ<sup>れ</sup>滞<sup>たい</sup>を<sup>い</sup>や<sup>り</sup>と<sup>と</sup>に

撈<sup>ら</sup>り<sup>て</sup>は<sup>は</sup>之<sup>の</sup>ハ<sup>ハ</sup>膠<sup>かう</sup>氣<sup>き</sup>あり<sup>也</sup>也<sup>也</sup>

紙<sup>し</sup>を<sup>ぬ</sup>ぬ<sup>る</sup>を<sup>ぬ</sup>ぬ<sup>る</sup>

細字或書之在紙或改  
此乃毛種或ハ紙少て拭  
履之ハ毛紙墨少細也

ハ害アリある

▲腹紙洗ふハ其肉乃わけ  
かゝを切うの小にみてもり  
洗ふ乃滞りし墨墨垢紙  
たうきり破紙抄也 洞天巻珠

▲毛邊紙ハ 南京乃官紙  
とよみねたよ唐紙を法家  
法ハ紙よりてきふ紙なる紙

▲とよみね紙洗ふて厚く  
すく甚堅かり紙黄赤ふ

して鶏卵乃久ふ似る紙  
とよみね俗小墨紙不いり

子とよみ甚白くして墨紙  
紙下呉と紙

▲腹紙乃中ふ常ふ番紙  
二つ三つ月と入るは墨漬紙  
の法うさる一是法さるる  
ふとろりあり

▲脯梅樹皮紙乃水不浸

てきまは光彩あり

▲冬月乃次の水不肉桂依碑

紙縮ふは之浸しきて用

むす片炭空ふを清く紙又

丁子紙用家とより

▲硯ハ紫原紙用は肌濃

うて澄みあり夏も水乾

か紙書石ハと水次なり

○赤間実より紫原書石も

み硯ふはより出れ工人ハ青石

紙猪まるといふ乃紙ハ他

取乃青石紙ハ一派ふ

▲墨紙摺るは石面ふ志のと

あやゆりやふ摺るはあま

はより方紙いよとらと墨書

可紙又あまよりゆりやらるも

墨濃かすはより紙用紙考

▲墨乃善悪紙試あまは太

字中実紙と紙とを紙じべ

細字よては書こがし

▲唐紙ハ片墨書を用家と

濃なる墨ハまればあり

▲地紙ちしハ紙かみ左ひだり墨すみ去いる

落おちくともやうやう小書せうしょ乃すなはち或

ハ胭脂あせい青あお黛たい灰はい墨すみ去いる入いる

かくら

▲墨すみ淡たん則すなはち傷やぶ神かみ彩さい太たい濃のう則すなはち

滞たい鋒ほう鈍どん書しよ学がく提だい要よう

▲養やう硯えん硯えん乃すなはち池いけハ乾かる

らら毎まい日にち水みづ紙かみかえかえてて洗せんす

じじ乃すなはち墨すみ紙かみ初はつハ水みづ紙かみ

たたくくハハ用もちらら好このハハ乾かる

まま乃すなはち久ひさハハ浸ひす

墨すみ紙かみ茶ちや世よにに洞天てんてん研けん録ろく

▲筆ひつ以も十月じゅうがつ正せい二月にがつ收あ者もの為なる佳よし

養やう筆ひつ以も硫りゅう黄わう酒しゆ舒しよ其その毫ごう洞天てんてん

▲筆ひつ毛け八はち秋あき八はち月げつ取とりり紙かみ未ま

白しろくくハハ身み一いつハハ紙かみ竹たけ

をを用もちすすハハ切きるるハハ但ただ小

筆ひつ乃すなはち紙かみハハ踏ふむむハハ莫な行り

紙かみ用もちすす

▲柔な紙かみハハ強つよ筆ひつ紙かみ用もちすす強つよ

居家秘用

紙は桑葉紙用ひて強  
桑相かきりしむる

唐紙小文字紙か紙て文字  
やうまてるるの裏より類紙とい  
はくろひ墨紙の文字紙補ふ  
毎

朱印肉 白鳥乃びく毛紙  
肉とよる紙良方と云又艾  
紙よくとよて空中乃清水  
おて曝一日ふ干し又とよ  
水ふて炙真白あて朱と

草麻子れ油と入て交合し  
但朱紙石乃櫛木とよしり  
黄糸紙さりて用紙底小  
まづとよる紙ななり

○又黄蜡 辰砂 胭脂 水  
加へるる也

○一方小竹乃と皮紙けぼり紙  
あまたと紙小力をまき紙く  
けぼりなる紙を薄くこぬ  
りふとりて用也



○染色

▲らんぼう染 まづあわ 先藍ふて下地 そまぢ

を染るの、ち楊梅皮十斤 マヤシののくわ

灰水二斗、令一斗ふた突せん

二番ふ水二斗入九升ふた突

右乃汁ふて三四度そめを

上灰融せん五升ふ鉄屑五合

或ハ古釘くらくま乃類灰入突せんふ

了らて好さゆ、せん五反ハ三日

冬ハ四五日ほど、せん五反ハ三日

一斗んそめ又楊梅皮乃汁



へはけの四反とむのかくれ  
 ぶくそめてあま事三反  
 して好まぬあま事一石の  
 友貝箱ハ豆反袖ハ之端乃  
 深汁なりけ法は深赤ふ  
 用家法あり但深赤は  
 木屑を下深紙せざる田(地)も  
 ようり一畝年乃好ハ赤いぞ  
 矢河一畝年下深紙よく  
 さらば好む矢かりくまて地  
 法

▲又法下地紙藍あてそあり  
 乃上紙五倍子石榴皮を煮  
 一畝年け又紙れ汁おひ  
 一畝一宿して止し紙乾る  
 け法地紙換でん

▲うそん深 うそん乃粉紙箱  
 一畝は八両ほど水へいそ茶  
 煉小麻をす分紙入そむ  
 但二時そりけはけそそら  
 一畝冬あつ八湯ふて深る

▲鼠久深 茄子乃本紙やれ

書長必用

炭と解しよく煮りて水で  
の釜を洗い切らば  
こして洗うべし但離して  
洗うべしははやありていろも  
よ

▲桑乃皮を煮じて糊を  
そむまは久しく落し

○いその本紙を煮じて洗うと  
久しく落し

▲砂ん紙を煮下地紙を煮  
小洗てうのと紙を煮本乃汁

水で二三返そめ紙漿を五倍  
子紙少加へて煮し

▲桑乃皮を煮下地紙を煮  
こびくそめをれと紙漿を

皮乃汁水で一返そめ糖乃  
灰汁めて煮し

▲竹乃皮を煮下地紙を煮  
火ふかり火うきひよく煮り

て大豆を煮りろの汁めて  
あはせろ灰少加へ刷毛で

洗ひて洗うべし思ひかけた

灰と紙は墨を少加へし  
又阿仙薬丸大豆汁小入を  
そひりしす

▲わろけ灸 右よりけ灸  
乃ごとくうきくして深し

▲崩黄深 下地を定灸用と

ふ藍めて燥うのふ紙かうを

乃灸一汁めて二返深うの

ふ紙用汁ふ朋薬少加へ

てそひり

▲柳皮竹下地紙汚漬

黄小をぬるのふ紙ありて  
乃灸一汁よへ一返をぬる  
のふ紙用汁ふ朋薬少加へ  
てそひり

▲黒豆び 菰本乃灸一汁

小て二返をぬるのふ紙楊

梅皮乃汁よへ二返をぬる又

菰本の汁よへ二返をぬる

乃灰汁めてとぬる法將求をか

け糸緑薬をかかるとす

▲菰本深 少加すまう紙を

居家必用

煮し唐乃明礬を合せ厚へ  
 一湯汁乃さあさる内は厚よ  
 死天のふかせけえよ一若冷  
 ころ時反稠濁或ハ去濁ふて  
 温め湯る一洗濁ふく一之  
 入をハ多り一洗をいじを  
 ▲黄ちや 楊梅皮乃煮汁  
 ふて二返そらろのと代桂  
 乃灰汁ふてとむる  
 ▲このちや 用汁ゆて二返潔  
 桂乃灰汁ふてとむる

てとむる

▲かちや 下地紙積本乃汁  
 ふて二返そらろのと代楊梅  
 皮乃汁ふて二返そらろのと代  
 桂乃灰汁ゆてとむる

▲紅潔 湯代何へおろとを  
 ころ紙厚いふとろて和をとれ  
 ろの舟へはちやとをろ一おた  
 うろろ代とを融紙ゆらハへ  
 又志づくはちやとをろ一おた

▲灰汁 潔赤小藍紙割しる

八辛灰をり身ふ熨殺乃灰  
 ちをうり加へて灰汁ふらして  
 用ひ去るがれハ糸あし辛  
 灰ハ檀柞等れ生枝乃灰之  
 ○麻世字灰濯めは綿室の灰  
 汁灰とら西○布帛灰濯ふ  
 ハ福葉れ灰汁を用ひ糸潔  
 蓄深まは粒乃灰汁を少加ふ  
 色は糸変せぬ○早福葉の  
 灰汁少て紅絹を洗へハ紅  
 く粉也

▲深毛法 馬乃毛狐早福葉  
 乃灰汁めてよく洗ひ米汁  
 小三日ほど洗ふ糸素水小  
 てよく洗ひ目ふかして好そ  
 むら深汁乃法ハ藜木脂  
 肥松十五 熊筆乃葉十枚入よ  
 く煮じ塩十五 敵おろくハ丸  
 湯加減うして深毛熱乾  
 ハあし但二日ほど洗ふ糸  
 取し加減を足目ふ月  
 三日ほどすすぎて水よてさう

くと洗ふなり。青久小染  
乃に緑青を酢ふてとれお  
茶一底ふいつらざるやうふ  
かたはりし少さゆして染へ  
し牛乃毛むくそゆり

▲藍乃も小付らるは藤黄  
乃煙ふて蒸れハさる

▲乃乃染汁も小染付らるハ  
酢小く洗ふなり又梅酢小  
洗ふとこし

▲本綿絹布とよに染地洗湯

小部しよく志月りて染ま  
ハひらるるしと染やしと  
汁を少あまらぬとあて  
染るし染汁少くまは染  
ひらるる

▲角類を染る法 磁釜小て

紅紙梅むね乃酢ふてとれ  
紅き五小生塩硝五分入炭

火小つけ紅乃あつらるる

時象牙あるハ鹿角馬骨  
棘の白骨乃類ふてはる

くろ御并緒しり乃類を染  
糸小甚紅なり

▲唐紅染 蘇木 百目 黄柏 二兩  
松脂 二兩 右二名を一兩小葉  
止まらば紅乃ぶとくおたが  
あがる

染やうハ

一右乃葉汁 四十目 かりやせ十五  
すみ 四目 明礬 三五  
右一兩ふありせ水二升入し  
煮じいく度と染厚して好

甄ふて蒸る 紅染乃ごとく  
くそゆる

▲洗染乃法 生染一升小水  
九升入らしひふてよく和合せ  
生布ふても晒布ふても先  
水よく粘氣をたし右乃  
洗水へほけよくと合せ棹  
小かけろの下小洗水乃入る  
たらしひを並て布をよめ  
と干して青度と洗水の  
煮るよとて染てるよと

洗<sup>し</sup>糸<sup>いと</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>よ<sup>よ</sup>死<sup>し</sup>  
久<sup>く</sup>小<sup>こ</sup>そ<sup>そ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

○雜門

▲旅中法 <sup>まんなら</sup>を<sup>を</sup>旅<sup>り</sup>中<sup>ちゆう</sup>法<sup>ぽう</sup> <sup>ちゆう</sup>時<sup>じ</sup>に<sup>に</sup>は

足<sup>あし</sup>小<sup>こ</sup>使<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>な<sup>な</sup> <sup>ちゆう</sup>定<sup>ぢゆう</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>

又<sup>また</sup>洗<sup>せん</sup>足<sup>そく</sup>して<sup>して</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>は<sup>は</sup>そ<sup>そ</sup> <sup>ちゆう</sup>塩<sup>しん</sup>

ぬ<sup>ぬ</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>足<sup>あし</sup>乃<sup>の</sup>裏<sup>うら</sup>小<sup>こ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り<sup>り</sup>火<sup>ひ</sup>小<sup>こ</sup>

て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

○又<sup>また</sup>道<sup>みち</sup>旅<sup>り</sup>の<sup>の</sup>時<sup>じ</sup>に<sup>に</sup>は

湯<sup>ゆ</sup>漬<sup>つけ</sup>飯<sup>い</sup>食<sup>く</sup> <sup>ちゆう</sup>食<sup>じき</sup> <sup>ちゆう</sup>合<sup>ごう</sup>

て<sup>て</sup>ろ<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>を<sup>を</sup> <sup>ちゆう</sup>煮<sup>に</sup> <sup>ちゆう</sup>煮<sup>に</sup>

飯<sup>い</sup> <sup>ちゆう</sup>煮<sup>に</sup> <sup>ちゆう</sup>煮<sup>に</sup> <sup>ちゆう</sup>煮<sup>に</sup>

ア



又汁液のやうなる飯に湯漬  
みして喰ふるとよい

▲早天まうてん山野えんやふりひ時とき生なま毒どく一  
塊くわい成な之のやうにま霧きり霧きり温ぬる氣け  
正ただ乃なり邪よこしま氣きふたらなるべし

▲六む蒜じ酒しゅ小せう浸じん一いつ鼻び乃なり孔こう  
小せう室しつ乃なり宮みや中ちゆう小せう室しつ氣き

成な之のやうにま又また面めん部ぶ手て足あし小せう酒しゅ  
邪よこしま氣きふたらなるべし

▲旅りょ中ちゆう宿しゆく小せう室しつ乃なり青せいより

草くさ蛙わ黄わう笠さ乃なりのの介け子こままり  
取と集じつ乃なり手て拭ぬぐ乃なりかり一いつ取と成な定ぢやう  
室しつ乃なり青せい小せう室しつ乃なり青せい  
乃なり朔しやく矢やあらるべしいいづいとと  
大だい事じ乃なり扱さく乃なり中ちゆう小せう室しつ  
乃なり青せい小せう室しつ乃なり青せい

▲人ひと十じゅう月げつ而して生なま馬ま十じゅう二に月げつ而して生なま物もの  
三さん月げつ而して生なま四し月げつ而して生なま猿さる五ご月げつ  
而して生なま禽かみ鹿か六ろく月げつ而して生なま虎こ七しち月げつ而して生なま  
虫むし八はち月げつ化か博物志

▲今いま剛こう妙みょう乃なり石いし成なんんががけけハ

石乃肌美あり

▲煙草紙貯るに先厚紙  
を以て之を封じ、その上紙油  
紙ありひの濃紙ふては、  
かゝるりて桐の管又ハ磁  
器ハ類古紙酒樽乃中ハ  
入るなり

▲山漆よく金真の病を治す  
▲養猫法 猫去杖二季ふ  
子成らむ杖乃子はねはく  
そらわらう性定紙おそる

右あり、六月十日、  
けり生きて一七日してを、  
て服を穿く三旬を、  
神て飯を食ふ一月、  
て猫乃おとさす、  
源時乳紙を、  
の〇れをも病猫、  
美汁又糠臭泥、  
び谷く治す又方胡椒、  
末紙水ふて丸一、  
の辛味ふ、

るーあり但頭くちらはとくを  
引あぐるふ御お乃の爪つめはあり  
りはとのハ法ぢせは又腰こしのぬ  
けはハ尾お乃の根ね小こ冬ふゆもれハ  
昂たかいかり。又猫ねこ爪つめ初はつめ  
飼かひと此こゝ蛤かき皮かわを念ねんしむ  
もはハふいにては

▲居す雄お法ほつ 雄おハハは海うみハは此こゝ

かより石いしハはねく射やりハは御お  
さ海うみねくハ石いし皮かわ射やりハは  
くおき此こゝハ海うみもれハは朱あまく

ぶけて画えー定ちやう乃のさげやハ  
れよそさ海うみハ八はち寸すんありハ六ろく寸すん四  
分ぶんさぐるあり一尺いちせきふ六ろく厘りんさ  
かりのはよりなるはハ傾かたむ  
死しをけかひおてさげす

▲草くさ本もと乃の滋しけハ皆みな月つき小こ庭ぢやう

ハ月つき備びまハ氣きこる月つきひ  
月つき虚うつらまハ氣き燥かわくま  
れ田でんハ小こ上じやう強ぢやうハ下げ強ぢやうハ  
ハ竹たけハ伐はく伐はく小こま

土つち蟲むしヤやー

▲小島乃病痰治せり  
番柿を氷水浸してその汁を絞る  
汁を絞る  
を餅とよませば昂いなる

▲今奥乃死とせり  
乃志はる汁を絞る  
生は昂いなる

▲鶴乃骨を以て  
ハ懸清然ある今腫の骨  
を用也

▲古中手延凍へる法

古酒一升生姜六十目皮紙  
さうとく細切し  
ゆかた紙で半分ほど  
さらさら紙小豆粒ほど  
足ふゆきばよく空気があせ  
だて凍へに

▲猪中食把を食  
艾乃生ある食食ハ紙紙  
志のぐ又挽葉よく飢

▲所風成去法  
竹葉小

紙を以て下小火候之至蓋れ  
ば衣服乃風乾して落家  
又白鳥乃其乃く紙水紙  
を入下常小結紙を以て風こ  
とぐくふ也

▲牛乳風紙敷くは面部振  
紙を以て洗ふ

▲當女紙を以て小児乃衫衣  
紙を以て洗ふ

▲紙を以て蛇乃類煙草乃脂  
紙を以て糊拵く蛇紙上

セグ

▲荊葉よく蚊虫小逼る

▲油を紙去法 青蒿乃其空

葉紙を電乃圓小捕く紙を

たゆり

▲生蠶紙晒し法 赤蠶小て

と青蠶小てと細小てを紙

とらけ水乃中へ片入

と紙を以てくとなりて置ま

紙を以て紙小てすくひ紙を

がく入り日高へ出く甘葉

帚ハシ小て水ミヅ紙カミをレ乾カめルて干ヒ  
靴カブチ紙カミ一ツ方カタ時トキハ又マタ水ミヅ紙カミをレ乾カめル  
皮カ之ノ乾カめルれど一ツて干ヒ  
半ハ三ミ日ニチ月ツキどもままばらるの  
ことくちあり

▲魚イサ系ケイ油アブ乃ナリ付ツらハ先マ紙カミ  
ぬらいとりて石イシ灰ハイ紙カミうらひ  
金カネ紙カミ

▲途トチ申マシふて肌カ小コ風フウの通トりてさ  
むらいは紙カミ紙カミ緋ヒ小コあつらう  
空カラ中ナカの旅ツリは紙カミ子コ紙カミ用ヨウ百ヒャク倍ベ

▲魚イサ鳥トリ紙カミ減ヘる法 鷹タカ鴨カモ止トへて

鳥トリ乃ナリ古コ紙カミと新アタラし紙カミ減ヘる法  
首カビの毛ケ糸イトと紫ムラサキ紙カミあげて  
尺シヤク寸スンふららり紙カミ多オホ紙カミ八ヤチ割割  
古コ紙カミやらううふらうう紙カミ深コい紙あるも  
一ツ月ツキのうらうううも一月ツキのうらう  
一ツ尺シヤク寸スン古コ紙カミ一ツ尺シヤク寸スン首カビと  
眼メ紙カミ一ツ尺シヤク寸スン紙カミ一ツ尺シヤク寸スン眼メ  
先マあり鱗ウロコと深コい紙糸イトの糸  
一ツ尺シヤク寸スン押オシて尺シヤク寸スンふらうう紙カミ一ツ尺シヤク寸スン蛸タコ  
ハ一尺シヤク寸スン紙カミをレ吸スイ付ツハ一尺シヤク寸スン紙カミ

甲付ハ少ク

△西海湖界 大坂より倭野

向石まで五十五里乃洞潮上へ

こぼる。白石より洞坊のぞく

しまぐ四十三里乃洞ハ是と

上へ備わ。どろりより流おの

山乃津所まで四十五里乃

洞ハ下へ梅。山乃津所より

肥前乃かむ津まで八十四里

乃洞上へこぼる。長門よりつ

乃をより北くとむろり見つる

●そらし乃潮と八九月ハ下へこぼる



日本居家秘用卷八終

号長必月ハ

七二





